

令和6年度 県立長野図書館協議会（第1回）議事要録

1 日時

令和6年（2024年）9月25日（水） 午後1時30分～午後3時50分

2 場所

県立長野図書館 3階会議室

3 出席者

<委員（五十音順）>

渡邊匡一会長 内山由香里委員 大林晃美委員 春日由紀夫委員 田川圭子委員

田中一樹委員 西山卓郎委員 平賀研也委員 松山佳奈子委員 棟田聖子委員

<県立長野図書館>

森館長 山田副館長兼総務企画課長 祖堅資料情報課長兼資料係長

白井課長補佐兼総務係長 犬浦課長補佐兼情報係長 槌賀企画係長 干川主査

町田主任 柳沢主任 丸山主任 小林主事 畔上主事 内川主事 佃主事

<長野県教育委員会事務局 文化財・生涯学習課>

市村課長 小澤主査

4 会議次第

(1) 開会

(2) 館長あいさつ

(3) 職員紹介

(4) 会議事項

ア これからの公共図書館を担う司書教育のトレンドについて

県立図書館の役割、市町村図書館の役割を踏まえて

イ 長野県図書館協会に対する県立長野図書館の役割として期待することについて

ウ その他

(5) 閉会

5 会議の概要

(1) 館長あいさつ（要旨）

協議会は2年の任期で今年の12月までとなっております。現任期の会議は今回が最後ということになります。節目の回となりますので、忌憚のないご意見をいただきたいと思っております。

協議会は年2回の開催ですが、夏秋に開催する会においては特定のテーマを定め、広く

深くご議論をいただくことを試みてまいりました。前回は「子どもの居場所」というテーマで、心の支援課の指導主事の先生に話題提供していただき、いろいろお話をさせていただいたところです。

本日は、二つのテーマを想定しています。一つは、図書館のいろいろな可能性を探っていくにあたり、変化の時代における図書館のあり方を考えるときに、司書教育が昨今どのようなになっているのか、そういったトレンドについて、上田女子短期大学の井上先生に話題提供していただきます。二つ目は、長い伝統を持つ長野県図書館協会および図書館大会について、改革を行っていきこうという動きが出てきております。そんな中で、県立長野図書館の役割として期待することについて、伊東会長から話題提供をしていただきたいと思います。

短い時間ではありますが皆様からのご意見を賜りたくどうぞよろしくお願いいたします。

(2) これからの公共図書館を担う司書教育のトレンドについて

県立図書館の役割、市町村図書館の役割を踏まえて

資料1により上田女子短期大学 井上奈智専任講師より説明（説明要旨1）

(3) 長野県図書館協会に対する県立長野図書館の役割として期待することについて

資料2により長野県図書館協会 伊東直登会長より説明（説明要旨2）

(4) その他

参考資料「信州横断 昭和・現代史講座」

「第74回長野県図書館大会 ご案内」

「北海道の芸術文化を掘る・残す・活かす」

「市町村における地域資料のデジタル化及びデジタルアーカイブ構築」

「第8回信州 知の連携フォーラム開催要項」

参考資料について館長より説明

(5) 委員との主な質疑応答、意見要望

ア これからの公共図書館を担う司書教育のトレンドについて（県立図書館の役割、市町村図書館の役割を踏まえて）

質 疑	応 答
県立長野図書館は、戦略的、政策的な意味において、頑張っって全国でも先進的なポジションを取ろうとしているという評価をいただいてやっている。一方、井上先生が	平賀委員から、市町村との関係性において、県内10ブロックを単位とした支援のあり方に言及していただいた。研修会や地区協議会などには、10ブロックの枠であった

ご指摘のように、各市町村から見るといろいろな課題がある。歴史的な経緯の中で、図書の物流およびシステムの導入という点で、長野県は10ブロックの郡単位に基盤を整えてきたという。非常に珍しい特徴がある。県立図書館の県域が広いこと、人的資源が十分ではないこと、予算もそうだが、ブロック単位で支えていくことが基本的なスタンスになっていると思う。

例えば上田地域は、周辺市町村と共通の図書館システムを導入し、そこに物流も導入し、ある意味中央的な中核となるような役割を果たすことになった館が主となって、その地域での情報共有や研修をしてきた。諏訪地域も同様。システム共有という意味では上伊那地域、上伊那郡も共通の仕組みを作り、情報共有や研修を行ってきた。北アルプスでは、幸い棟田委員がいてくれたので、県立図書館としては、例えば「新聞データベースを共同で導入すること」を提案して、そこでもっと濃い関係を作れないかな、というふうに、お願いした。

図書館一つ一つは10万冊、20万冊、30万冊といった規模だが、広域ブロックを考えると100万冊を超える図書がある。これは地形的な理由もある。特に物流とかシステムとか、あるいはそれぞれのプログラムデザインとかの意味で、県立が果たす役割は何か、そのブロックに対してどう向き合うかって、すごく大事だと進めてきたのが、この10年くらい。

そこをもう1回どう見つめ直して、どういう形でそのグループと一緒にやっていくのか。これ会議後半の議題にある、図書館協会の研修とかでも繋がっていく。長野県が積み重ねてきた財産を各広域図書館サー

り、県内4ブロック単位での集まりに呼んでいただいて、情報共有やディスカッションができるようになり、有り難いことだと思っている。

一方で、井上先生から、「県立図書館が主張している県立図書館の立場から見た長野県の図書館の姿」と同時に、各地域の図書館がどう思っているのか、聞き取りをしてくださって、それが年によって違ったり、地域によって温度差が全然違ったりしているのを感じて今日ご報告くださったと思う。特に南信の方では、本来は県立図書館がやるべきことを担っていただいていること等について、お言葉をいただいた。県立図書館は「耳が痛いことにこそ耳を傾けなければならない」というふうに思っている。

物理的な図書館サービス、本を届ける仕組みはこれからも努力していくが、それでもやっぱり限界がある。デジタルという形を使っていくことを平賀前館長の改革で「信州ナレッジスクエア」という形で道筋をつけてくださっていた。それを引き継いで今、デジタルアーカイブ、電子書籍とデータベース等、いろんな形で空間におけるネットワークの利用可能性も含め、やってきた。物流については地区単位が有効だが、デジタルの場合は地区という枠を超えて取り組むこともできる。新たな可能性も考えて行きたいし、実際に「デジとしょ信州」は市町村の皆さまが主体的に関わってくださるからこそ、成功している。

とはいえ、蔵書のボリュームは紙が多く、全県で1,000万冊ある。電子図書館は3万点。圧倒的なボリュームの差があり、まだまだ評価をしていただくには、道半ばだなと実感しているところ。これからも様々な

<p>ビスでどう最大に活かしていくのか。ということが、県立図書館にとってのメリットであり、同時に強みであると思っている。</p> <p>県立図書館のポジショニングを綺麗に見せている「ミッションステートメント」は、もう少し中短期的な話として、長野県という固有の各地域 10 地域のブロックの営みを私達が支えるのだと。一館一館、全てに対して物やコンサルテーションをすることはできないが、10 のブロックを尊重してみんなでやっていきたいと思います、言葉としてどこかにステートしておくことも必要ではないか。(平賀委員)</p>	<p>単位で、有効な方策を実現していきたい。</p> <p>後半のテーマで取り上げるが、長野県の図書館協会は、学校図書館、大学図書館、公共図書館等が一つの協会として活動を行っている、その最大の事業である図書館大会は、小学校の校区でブロックを分け、現在は図書館大会を 14 の地域で持ち回り開催している。「単位が小さすぎてもうできないよ」という声も聞こえてきている。ブロックを少し大きめに捉えて、自立的な活動が可能なボリューム感を考慮しながら、検討チームで方向性を考えて行きたい。</p> <p>(館長)</p>
<p>書店についていえば、人口が減少しているので書店が減ってくるのは当たり前の話で、アマゾンとかネットとかが台頭してきたことでこの形になってきた。長野県は 52%位が市町村に書店がないという実態があるので、それは沖縄県に続いて第 2 位で、寂しいなと思いますが、図書館がそれにあぐらをかいていていいのかと思います。公共だからこそ、司書としての役割を、どのように考え、どうしたらいいかを考えていく必要はある。</p> <p>人対人の、対人に関して、司書として重要な役割になってきているとしてお話されているようなので、何かその辺のお考えはあるのか。(田中委員)</p> <p>具体的にどういうことをやっていくのか。それをやるために、どういう人がどういう能力・素質・経験があるといいのか。</p> <p>例えば、新たな評価指標、教育や、外部の人を交えていったらいいのか等、具体化していかないと、うまく進めるのは難しいのではないか。その辺のお考えがあったら、</p>	<p>田中委員、西山委員のお話を受けて、県立という広域自治体ならではの今後求められる役割を考えたときに、直接サービスのスキル、能力、経験に加えて、ネットワークを作っていくとか、場作りをするとか、システム基盤を構築するといった力が必要だと改めて思った。</p> <p>それは、書店さんとの関係性もあるし、一自治体、県の単位だけでは難しいことは、国立国会図書館と繋がることで可能になるといったことも含め、視野を広げて考えて行く必要性を改めて感じた。今、都道府県立図書館職員研修が実施できないか、文部科学省にもご相談しているところ。</p> <p>「図書館法」の定めに従って、文部科学省が平成 13 年に「公立図書館の設置及び運営上の望ましい基準」を策定し、それが平成 28 年に改訂されたが、その後更新がされていない。令和 5 年度末に閣議決定された第五次「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」に改訂の検討を行うことが明記されている。</p> <p>これからの図書館を担い、地域をけん引</p>

お聞きしたい。(西山委員)	<p>していけるような人材育成につなげていきたいと考えているし、図書館職員に必要なものは「司書」の資格に限らないのではないかと、いろいろな能力がある人がチームで取り組んでいけることも必要で、そういう構想をつくり、実現し、マネジメントできる、一緒にやっていける人たちを増やして行きたいと考えている。春日委員の発言にもあった、図書館、博物館といった文化施設だけではなく、公民館もということについては、令和6年2月に MLA (Museum, Library, Archives) 連携の発展形で「MALUTICKS 連携」(MLA+University, Theater, Industry, Community, Kominkan, School) が一緒になって協働することを提唱した。</p> <p>(館長)</p>
---------------	---

(意見)

- 今の県立長野図書館の方向性を勉強すればするほど本当によくできている。勉強させていただいている。長野県に着任した去年とも雰囲気が変わってきている。国立国会図書館(NDL)もオンラインサービスをするようになってから評価が上がったのは間違いない。その意味で県立図書館とNDLは、相似している部分もある。物理的な動きという意味では、長野県はそれぞれに仕組みが出来上がっているのだから、今から県立図書館が何かするより、オンラインの方がまだまだポテンシャルがあるし、県内の図書館からの県立図書館への思いを変えるきっかけになるのは間違いないと思う。その方向でサービスを突き詰めてもらえると嬉しい。司書教育としてどのように実装していくかについては、デジタルアーカイブなどを含めるようにされていると思う。図書館その次のステップの面白さみたいのはどうやったら生まれるかなと考え、私なりの考えを「話題提供」の最後に記載した。(井上専任講師)
- 私、公民館という立場で参加させて頂かせている面もあり、先ほど市町村連携がいろいろ言われているわけですが、図書館の経験なんかも踏まえて言いますと、まだまだ図書館は図書館、公民館は公民館っていうような、何か自分のテリトリーを守るっていうところに注力している状況があるのではないかといつも感じている。これから人口減少も進んでいくわけですし、ぜひその辺の壁を壊してもらいたい。

例えばその地域の課題っていうものについても、図書館にしても公民館としても重なるところが大きい部分があると思う。今までみたいに人口がたくさんいて、いっぱい来館してくれるときには、ほっておいてもよかったのかもしれないが、これからはみんな連携してや

らなければ、とても解決できないっていう方向にいくのではないかと考えています。そういう意味では国会図書館（NDL）だけじゃなくて、公民館とか、そういうところと思い切って連携していったらと思います。

地域の課題っていうものにお互いにコミットしていくっていう前提のもとに何ができるのだからってことをみんなで話し合うのもいいのではないかと考えています。

当館でも地域資料のデジタル化というのは、県立図書館のご協力のもとに進めているが、できればここに市町村図書館も入っていただければさらにいいと思う。今のところ、博物館と近くの大学など、色々な関係者の方が協力していただいている。色々な立場の者が参加していただくことがこれから大事になってくるのではないかと考えています。

もしそういう司書教育というものに、焦点を当てれば、地域課題を共に一緒にやっていく、コーディネートをする力が、力の前にそういう視点が司書の皆さんに身につけていると、例えば研究をしていこうという、場作りっていうものにもコミットしていけるのではないかと感じている。（春日委員）

- ・ 先ほど平賀委員がおっしゃった 10 ブロックに注力をして、というのをしっかり見える化や言葉としてもちゃんと伝えるとお話があった。市町村のブロックごとの力を使うというのは、南信州における飯田市さんの存在のように、北アルプスや、木曾であったりすると地域として県立さんと何か一緒にやっっていこうっていうそういう動きがないと、そのブロック単独では、難しいという実情はある。10 ブロックというくくりで考えるよりも、もう少し大きな枠組みの中で、県立さんが何か一緒にやっっていこうっていうふうなイメージを持っていただいた方が市町村としてはありがたいと思う。（棟田委員）

- ・ 小諸市で NPO 法人として図書館運営携わっています。いわば企業として自治体と対峙している。もう一つ、他の市町村とは違う悩みとか実態とかがあり、結局、司書として職員を採用する側にもなっている。面白い人が集まったらいいなというところで司書資格はあった方がいいが、なくてもいいよという中で面接をする。

司書資格なくてもいいという図書館への憧れだけでぜひやりたいという夢を見てくる人が多い。これだけでは駄目なのだというところもあって、司書っていうのを本当に改めて考えているところでもある。自治体とか 10 ブロックとかそういうものの前に企業体にならなきゃいけないので、ちょっと違った日々の葛藤をしている最中。（大林委員）

イ 長野県図書館協会に対する県立長野図書館の役割として期待することについて

質 疑	応 答
長野県図書館協会は基本的には何をされてところなのか、長野県図書館大会とは、一般の方も参加するのとか、そのあたりを教えてください。（松山委員）	第 74 回長野県図書館大会（須高大会）のチラシをご覧ください。協会の一番大きな事業が図書館大会。図書館大会というのは一般の方にもご参加いただけるものです。大

大きく分けて基調講演と分科会の2部構成になっているが、今回の基調講演は『魔女の宅急便』の著者、角野栄子さん。オンラインを併用しない、集合開催のみはコロナ以降初めてなので、参加者が少ないのではないかと心配したが、著名な方ということもあり、久しぶりに800人近い申し込みが来ていると伺っている。

一方、作家さんなどの著名人ではなく、大会テーマ、その後の分科会の内容に直結するお話をしていただくこともある。令和5年度の松本大会は、軽井沢風越学園の岩瀬校長先生。令和4年度の飯田下伊那大会は『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』の著者である国立情報学研究所の新井紀子先生に基調講演をお願いした。こうした場合は、一般の方の参加はやや少ないという状況。それぞれ、その大会で何を大切にしたいか、地元実行委員会が中心になって決めていただいている。一方県外では、鳥取県や埼玉県は図書館大会に書店商業組合が一角を担っておられると聞く。同じ読書文化を振興する仲間として、コミットしてくだり、協賛の欄に書店商業組合が入っていたりする。長野県ではなかなか、連携ができてなかったが、書店在庫情報と県内図書館の蔵書横断検索の仕組みを繋ぐことができたこともあり、今後は一緒にやっていきたい。

(館長)

<p>新たな役割のところでは言っている文化資源コーディネーターの存在を、皆さんは、どのようなイメージをお持ちなのか。これだけ見るとこんな条件付きで、こんな人間がいるのか、雇えるお金はどこにあるのか、相当に考えてしまうので、具体的にどのような形で実現できそうなのか。(西山委員)</p>	<p>どこにこんなスーパーマンがいるのだろうと感じますが、県立長野図書館で「信州デジタルコモンズ」を担当している職員は既に文化資源コーディネーター的な役割を求められている。専任の担当者ではなく、一職員の業務量の1割程度。時間がかからない中ではあるが、春日委員にお声をかけていただいたら、最初はスキャナーとパソコンを持って駆けつけ、今度10月2日は平賀委員からお声をかけていただき、現在の担当者と前担当者が2名で駆けつける予定。「この地域でこういうことをやりたい」、という声上がり、それが「信州デジタルコモンズ」で実現できるとなれば、喜んで我々は出かけていく。しかし体制的にはかなり無理があるし、そういうことができるようになる研修や教育がないままに、先輩の背中を見ながら自助努力で頑張ってくれている。そんな状態なので県立図書館としてこの事業を更に展開するには体制を整え研修も行い、司書としての能力プラスαで、例えば社会教育士や学芸員の資格なども強みにしながら、必要な知識を体系的に入れ、経験値を積みながら、強みを持つ図書館員を育成していきたいし、キャリアパス的なことも含めて、考えていけないと思っている。一方で図書館側だけの持ち出しではなく、各地域にこういった役割を担ってくださる存在が不可欠。春日委員や平賀委員の活動などがまさに相当すると思う。相互乗り入れでやっていければと思う。</p> <p>(館長)</p>
<p>都道府県立図書館に求められる新たな役割の都道府県立図書館にも指導主事をおくことが望ましいというそこに関してです</p>	<p>指導主事を図書館に置ける可能性については、検討していただいている。やっと声を上げ始めたところ。</p>

<p>が、公共図書館に勤務する前の学校司書時代に、県立長野図書館の存在感はゼロでした。</p> <p>今でも多分市町村の学校司書は、県立図書館さんが何かをしてくれるってことに関しては、全く期待感を持っていないような現状だと思う。県立図書館としての学校支援は、図書館法を考えると絶対にやっていただきたいと思う。今の、人材がいらないところでは、難しいと思うが。</p> <p>指導主事を置くことに関して何かしらのアクションを今後とってくださるイメージはありますか。(棟田委員)</p>	<p>コロナ後にさまざまな立場の方と話せるようになって状況がわかってきて、他県では、そんなことまでできるのか。長野県はどうしてできないのかと考えてみたら、体制が全然違う。しかしよく調べてみると配置することが推奨されている。それならば声を上げ、一朝一夕には実現しなくても、努力していきたい。</p> <p>今日こういうテーマを設けさせていただいたのも、皆さんが後押しをしてくださったら、必要とされているのだからということで、重ねてお願いがしやすくなると思う。</p> <p>小中学校は市町村立なので我々が直接小中の学校を支援するより、その地域の公共図書館の後押しをする間接的な形が理想だと思う。そういう意味で図書館協会のあり方については、小中学校部会の事務局機能の強化のために、県立図書館のコミットができる体制づくりが必要。</p> <p>こういう相談ができるようになってきたのも、「デジとしょ信州」に協働で取り組んだおかげ。市町村や学校との関係性が少しずつできてきていることを大切にしたいと感じている。(館長)</p>
--	---

(意見)

- ・ コロナを機会に大会のありようを見直すきっかけになったが、とてもある意味、色々なイベントとかそういうものの開催のあり方を根本的に考えて、むしろそれがいいように広がったって側面もあったと思う。ただ、今の館長さんのご説明を伺いますとやっぱり有料でチケットを売っている以上「オンラインが切れたので視聴できない」とはならないので、業者さんを入れ、業者さんを入れれば入れるそこでまた経費が別途かかってくるし、そこまでの予算はなかなか難しいということで開催のあり方で非常に難しいのだなと思いました。けれども、これからはオンラインの開催っていうことを、もっと一般の方もむしろ極端なことを言えば県外の方でもどんな方でもチケットを買えばそこで参加できる。無料で参加できればいいなどは思いますが、そのあたりは予算的な問題があって難しいのだろうと思います。これからの時代はハイブリッドのオンライン開催っていうことはある程度視野に入れていかざるを得ない

のかと私は感じました。(田川委員)

- ・ 公民館で事業実施中にデジタル化をしたいかっていう話があって、県立図書館にこういうシステムがあるという話は、知識として何回も公民館委員の皆様にお話ししたが、反応するのは非常に冷たくて、「そんなものは大変だろう」とか「いつも口だけだろう」とか、そういう話が結構正直ありました。ところが求めに応じて樋賀さん、それから館長さん始め多くの方が実際に来ていただいてそこでデモンストレーションをしていただいて、何回も来ていただいた方もおられます。そういうのを見て、これは本物だ、本気だなとわかって、今の雰囲気は、俺たちは日本の先端をいっているんだ、県立図書館と一緒にこのデジタル化を最後までやり遂げるんだ、という気持ちで、私も含めて素人ですが、公民館がそういう雰囲気です。非常にありがたいことですし、そのきっかけを作ってください、実際に来て、皆さんに見せていただいた姿が、非常にインパクトがあった。(春日委員)
- ・ どうしても県とか、どこもそうなのですがトップダウンの啓蒙的なスタンスになってしまうが、さっき棟田委員がおっしゃった、いろいろなことも結局は、現場に一番近いところの人たちが動くようにならないければ何も物事は変わらないんです。それに対してこの戦後、営々と築かれてきた教育関係組織のヒエラルキー、大会みたいな前時代的になるのか、大々的な大会なんていうものもそうです。それは大衆に対して何か指導していかうみたいな、やっぱりそういう時代の名残ですよ。

県の図書館協会も最初は研究組織として図書館法の施行とともに始まっているが、これが拡大したのは昭和30年代になって、県立図書館が当時展開した読書推進活動ですね、PTA 母親文庫活動というものが、それが草の根レベルでの村落の婦人たちによって、本を読む活動に対する熱を産んで、その人たちが盛り上がり大会っていうものが、当時、長野県図書館大会の参加者は2000人を超えて3000人近い人が集まっていた。今は、何百人です。今2000人の人を集める大会は静岡県だけだと思う。そういう盛り上がりがあったので、あたかもその組織が機能してきたような気がしていましたが、そうじゃなかった。

20年前ぐらいに上田市立図書館長、前協会長の宮下さんが、このままじゃだめ、県立図書館が研修一つあまりしない、全県的な視点はないというので、図書館協会を使って研修事業をやろうとか、なるべく県からそういう全県的なサポートについて協会に移そうと、一度なった。ところが、図書館協会といっても2人しかいないわけですから、それじゃ難しいでしょうと、ということでやっぱり県立図書館が全県的な図書館政策を担っていく立場を取り戻さなきゃいけないってことで、研修費用も含めて、お金の使い方も含めて、県立図書館が全県的な図書館政策についてのイニシアチブを取ろうとシフトされたてきた。僕はもうその大会なんていう前時代的な話ってというのはどうなのかなって思う。

もう一つ言えば、今の図書館に関わるいろんな取り組みを冷静に見てみましょう。例えば高校図書館は学校図書館司書の労働組合が研修事業まで全部行って県立図書館が手を入れようと思っても、拒絶される。そういうケースもある、あるいはSLAと言われる各地域における高校図書館の生徒の活動も含めた活動もある。それから、各地の教育委員会は、図書館教育

委員会みたいな、あるいは、図書館教育問題研究会というような形で、先生たち司書教諭と校長たちを中心とした集まりがあり、その集まりが協会の学校図書館部会になっている。あるいは私的な繋がりや図書館問題研究会とか、非常にいろんな取り組みが複雑な、階層構造をなしているのが、この県立図書館をめぐる状態です。

なので、協会と県立図書館の関係を考えるとというのは、そうした様々なものも考えることになるし、啓蒙的な上から下への何か方針を出すっていう時代ではもはやない、とは言いながら、みんなが困っていることの基盤を整えながら、例えばデジタルアーカイブをみんなが使えるようにしたり、電子図書館も作ったし、研修体制も10ブロックを支えるような形で何かをしようという取り組みをしてきたと思う。その辺の議論というのは、ぜひ協会と県立図書館だけじゃなくて、そういった利害関係者がいるので、巻き込みながら議論したらいいと思います。

もう一つは協会の実態を言えば、会長と事務員1人、事務局は県立図書館が担っている。事務員1人が何で必要か、学校図書館の部会を支えるためであり、学校図書館部会がやる会合に出張したときの旅費の計算や、議事録作成とか。事務局の負担を会費で、協会が学校図書館から集めて開催にあてるといって形になっています。そこからいわゆる会費をとっていくのか、取った会費を返さなきゃいけないのか、そういったことも複雑に絡んでいる。

本当に話したかったのは、研修のあり方です。誰が研修をするのか、だれが、今までのように何かを教えてもらって覚えてくるっていう話ではないでしょう。その辺も含めて、協会の在り方を議論されたらと思うけれども、基本的に僕は、県の組織として、県立図書館は県の図書館政策について、みんなが使える共通の基盤について整えるという責任を負うべきであると思います。それは職員がたくさんいるとかいう話では必ずしもないと思います。指導主事がいたって、高森町の宮澤優子司書さんがおこそうとしたようなことは起こらないんですよ。

受け側に春日館長のような人がいなければ文化資源の活用も起こらない。ただそのそういう人が生まれるような基盤をどう整えるかっていうのが図書館政策で、県立図書館がリードしていくこと。図書館大会の有無じゃなくて、そういう協会と図書館のポジショニングの検討も必要だと思います。(平賀委員)

- ・ 文化資源コーディネーターの話は、このような存在をいきなり全国に、というのはなかなか難しい。単独でこういう存在になるためには多分20年ぐらい時間がかかるだろう。ある程度力を持っている人たちが複数集まってコーディネートをするという形を、県立図書館に期待する。例えば信州大学の卒業生の中には学芸員の資格を持っていて、県の一般行政職として勤めている人たちが何人もいる。彼らは、在学中に3、4年間、寺社の調査を経験している。図書館には司書職以外に行政ポストもあると聞いているので、実は司書や学芸員の資格を持っているという行政職の人を図書館に配属してもらえるよう、ぜひ図書館でも考えてほしい。

また、アーキビストや社会教育士など、比較的新しく作られてきた資格については、個人の負担ではなくて、図書館の仕事として、時間と金銭的な側面でサポートする制度も整えてもらいたい。資格と能力自体をそれぞれの個人に帰するのではなくて、必要なものであれば制度化しながら職務として取得できることも考えていかないと、なかなか成果へと繋がらない。MLA

連携とかであちこちを巻き込んだのは、本来研究というのは総合的なものであるため。それを県立図書館の役割と考えるのであれば、みんなでやる方法をぜひ考えていただきたい。(渡邊会長)